

首里城正殿復元整備について ～火災から4年～



R5.9.4撮影

1. 首里城正殿復元整備について

令和元年10月31日の火災により首里城正殿等が焼失してから4年が経過しました。

材倉庫・原寸場が完成し、10月より搬入開始した大径材（国調達分356本、沖縄県調達分178本）が令和5年7月までに全て納入されました。正殿本体工事は木材倉庫等で令和5年2月から木材加工が始まり、8月には工事中の正殿を覆う素屋



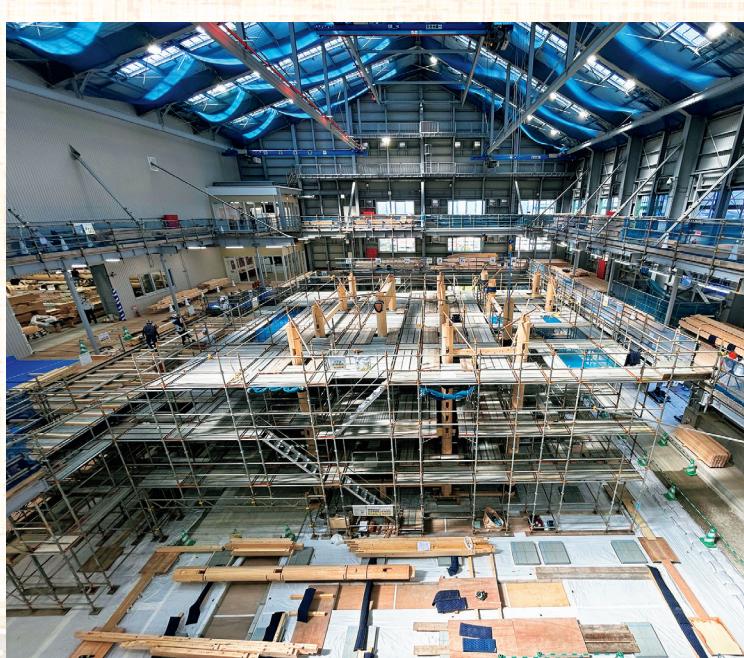
大径材(梁や桁)の搬入状況(国調達分)

大径材(主に柱)搬入状況(県調達分)



木材(柱)加工状况

正殿の一木目の柱を吊り上げる状況(B5.9.4)



素屋根内全景(建方の状況・R5.9.12撮影)

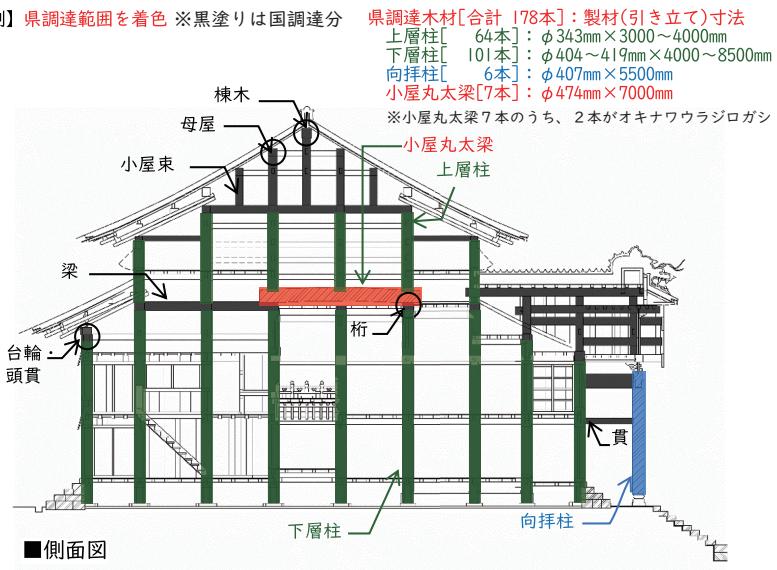
根が整備されました。

着々と工事が進む中、9月4日(月)には正殿の最初の1本目の柱が御差床(国王の玉座)周りに設置されました。現在、正殿の柱や梁を組み立てる建方が本格的に進められており、年内を目途に組み上がる予定です。令和8年正殿復元へ向けて順調に整備が進んでいます。

2. 沖縄県首里城復興基金による取組状況

県内外の皆様からの寄付金による沖縄県首里城復興基金の一部を活用し、正殿本体工事に用いる木材、瓦類、石材、彫刻類等を調達することとされおり、沖縄県は正殿の復元工程に合わせ、国から提供された仕様をもとに円滑に制作、引き渡しできるよう取り組んでいます。沖縄県からは令和5年

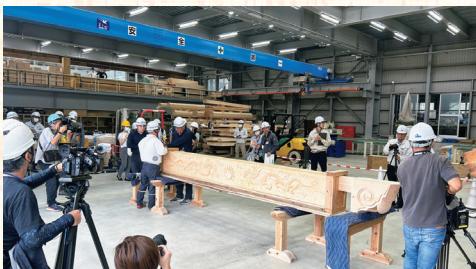
3月までに主に丸柱となる大径材（国産ヒノキ169本、イヌマキ6本、オキナワラジロガシ3本）※予備材含む、7月には礎石105個（建物の基礎となる柱を載せる石材）、8月には天井額木等が国へ引き渡され、今後も続々と各材料が納入される予定です。



沖縄県が調達する大径材の内訳



沖縄県より搬入された礎石の設置状況(R5.7)



沖縄県より搬入された天井額木
(正殿2F御差床の上部の彫刻された梁) (R5.8)



木材倉庫・原寸場見学エリア(R4.10~ 内部より撮影)
(小屋丸太梁加工状況 内側の2本はオキナワラジロガシ)

首里城再建に向けては、様々な情報発信や復元の様子を公開する「見せる復興」をテーマとして各種取組やイベントを実施しており、主な事例を紹介します。

(1) 復元の様子を段階的に公開



素屋根見学エリア1階(R5.8~)



素屋根見学エリア2階(R5.8~)

や梁)の組み上がりしていく様子を確認することができます。

3. 見せる復興について

(2) 壁面グラフィックの公開



木材倉庫・原寸場壁画グラフィック(R4.12~)



素屋根壁画グラフィック(R5.11~)

令和4年12月木材倉庫の壁に正殿完成イメージを描いた壁面グラフィック（以降、壁画という）を公開しました。壁画は縦約12m×横約40mで奉神門をくぐると最初に目にることができ、園内の人気フォトスポットの1つとなっています。

また令和5年11月には正殿背面側に位置する素屋根の壁にも壁画

（縦約16m×横約40m）を公開し、御内原の世誇殿前や東のアザナから眺めることができるようになります。

なお、木材倉庫、素屋根は令和7年には撤去予定ですので、今だけの両壁画を見に皆様も足を運んでいただけると幸いです。

前述の令和5年9月4日（月）に正殿の組立てが始まり、これを記念して9月9、10日に普段は入れない素屋根内の見学や宮大工体験（予約制）などの一般来園者向け特別公開イベントを行い、約3000人（見学：2702人、体験：259人）の参加がありました。

体験イベントでは施工業者に協力いただき、宮大工による木と木

をつなぐ「継手」の解説や、参加者が実際に鉗子を使つて木材の表面を削る加工作業の体験等を行いました。



素屋根1F見学状況



素屋根2F見学状況



檜がんな体験



宮大工による木と木をつなぐ「継手」の解説



見て・触れる大工道具体験

お問い合わせ先
開発建設部 建設産業・地方整備課
☎ 098-866-1910

(3) 特別公開イベント（素屋根内部の公開）の開催

をつなぐ「継手」の解説や、参加者が実際に鉗子を使つて木材の表面を削る加工作業の体験等を行いました。

今後も見せる復興に関するイベント等に取り組み、来園者とともに首里城復興を盛りあげていきます。